

地方修驗者による孔雀明王經の開板

佐藤俊晃

前稿〔拙稿「道元にあがれた修驗者」印仏研四三一、二、九五〇三〕にて紹介した秋田藩比内綴子村(現、秋田県北秋田郡鷹巣町綴子)の当山派修驗者、般若院英泉(一七一四～八二二)について引き続き考察を重ねたい。今回は英泉の学問的業績の最も大きなひとつと数えられる『孔雀明王經校訂本』の開板事業を取り上げ、特に開板前後の経緯を、英泉および孔雀經開板関連文献を多く所蔵している内館文庫所蔵資料によって跡付け、二、三の特徴について報告したい(内館文庫、般若院英泉については前稿、および石川力山・佐藤俊晃共同研究「内館文庫所蔵資料の研究一」『駒沢大学仏教学部研究紀要』五二、九五〇三を参照いただきたい)。

孔雀明王について、修驗道ではその祖役小角が孔雀明王の呪を修し、数々の奇跡を実現したと伝えられ、一般的に除災与楽の加持祈禱において、この明王の呪が修されることが多かったとされ、また理源大師聖宝はこの明王の修法を五穀の発育と慈雨を請うための法とした、と言われている(修驗道辞

典)。孔雀明王經のテキストとしてはT19-No. 982~988が知られるが、本報告で扱う英泉校訂本は不空訳『仏母大孔雀明王經』三卷No. 982と義淨訳『仏説大孔雀呪王經』三卷No. 985の両本の系統本をもとに校合していると考えられる。ただし本稿では英泉の校訂作業のトレースや校訂本のテキストとしての意義について言及するなどの余裕はない。

刊行された『仏母大孔雀明王經校訂本』は上中下の三巻本であり、内館文庫内に現存する。英泉による孔雀明王經の校訂作業とその開板は、実は英泉一人の業績ではなく、英泉の没後、その校訂原稿をもとにして開板のための勸募活動に尽力した英泉の弟子であり甥の神宮寺龍峰、その弟子尊宥らの共同事業と言ってよいものである。英泉の孔雀明王經との出会、開板の発願、英泉没後龍峰による開板勸募とその成就、開板後の寄進者への対応等の経緯については、内館文庫所蔵資料によってかなり詳細にその推移をたどることができ、次に年譜形式で以上の関連事項をまとめてみた(資料名

は省略。概ね資料に明記された年次によって各事項を配列しているが、年次不詳のものについては前後の関係から妥当と思われる配置を施している。

孔雀明王經校訂本開板関連事項年譜

延享四（一七四七）九月一七日 英泉、江戸で入手した『佛

說大孔雀呪王經』（刊本、義浄訳）に、山形小白川村威徳院

慧興所蔵本（不空訳）をもって校合、訓点を施す

年欠 英泉、孔雀經法を書写（安貞二年の奥書有り）

年欠 英泉、孔雀明王法を書写す

年欠 英泉、孔雀明王法口伝を書写す

寛延二（一七四九）四月一八日 英泉、高岩山において孔雀

明王法授与す

宝曆元（一七五一）十一月二七日 英泉、『仏母大孔雀明王

經』不空訳本を山形に得て上山松本氏節亭室にて書写し始

め、山形後藤氏時中亭にて終わる

年欠 英泉、孔雀明王法を掌峰に伝授す。

年欠 英泉、孔雀經法を（編集）書写す

明和七（一七七〇）三月二六日 英泉、大館青柳形右衛門寅

吉より仏母大孔雀明王經（刊本、不空訳）を寄付さる

年欠 英泉、『仏母大孔雀明王經並法授受靈驗』を撰述

明和九（一七七二）英泉、『孔雀經開板発願文』撰述 三月

英泉『孔雀經利益靈驗』撰述

年欠 二月一日 般若院（英泉）、清水清五郎宛に孔雀經開板の勧募を願う

安永七（一七七八）神宮寺、『大金色孔雀王呪經』（刊本、羅什

訳、三卷、明和七年刊）を求む

天明二（一七八二）二月四日 英泉没

寛政五（一七九三）龍峰、『孔雀經開板募縁簿』、『孔雀經開板

注文之覚』、『南比内村之覚』を撰す

寛政七（一七九五）七月（龍峰）寛政七年自り檀信を募縁し

施財を乞求む

寛政八（一七九六）七月（龍峰）京都醍醐に登て唐和高麗之

原本を集め定隆大僧正（座主御師範一山法務職、龍光院住侶仏

眼院兼帯）の校合を得て一山の評議に預り御門主の許容を

蒙り、西御役所へ出て之れ（孔雀經開板の事）を届ける

七月晦日 書林耆屋甚助、神宮寺より金子二両請取 七月

二日～九月二日 十度にわたり書林耆屋甚助、神宮寺

より金子二十五兩二步請取 一〇月 龍峰、『仏母大孔雀

明王經校訂本』を開板する。「七月より十月に至て板刻成

る」一〇月一日 耆屋甚助より神宮寺様、常寛院様あて

書状。孔雀經新刻の板木永代預かりにつき、冥加として御

經三十部差し上げたきこと、ついでには三月上京の節、この

一札と引替に御渡し申し上げること 一二月 神宮寺（龍

峰）より御奉行ならびに各様方へ勧募書の控えを記す。孔

地方修験者による孔雀明王経の開板（佐藤）

雀経開板諸経費の内訳と、師英泉の孔雀経開板発願のいきさつ、ならびに今夏上京して開板に至るまでの経緯を述べ、なお経費不足につき改めて募縁御願いの件 一月「板刻成ると雖も内障有て献経の表札を済まさずして霜月帰国す」 二月三日 神宮寺、常寛院より耆屋基助殿あて書状。孔雀経新刻の元板は貴方でよろしく御預かりいただきたく、また孔雀経三十部については後日伺うとのこと 年欠 孔雀経開板諸経費の見積り控えを記す

寛政九（一七九七） 孔雀明王経開板の由緒書を撰述する。（寛政九年七月二十五日までの記述有り） 二月 孔雀経新刻本願主各人の寄付料控え記す 六月（龍峰マタハ尊祐カ）京に出る 七月十五日 醍醐寺僧正定隆、刊本『仏母大孔雀明王経校訂本』に職語を記す 七月二十五日 「七月後七日新板を穿鑿し、同二十五日醍醐御門主ならびに定隆大僧正その外有職の住侶新経摺立献上しならびに御礼の儀相濟ませ、西御役所へ届け新経見済の上、宥、板を出して之れを弘め、秋田板本永久に備え預け置くものなり」 秋 源継光観甫より神宮寺龍峰あて書状。孔雀経開板への祝辞。

寛政一〇（一七八九） 六月四日 龍峰、祝辞を撰述す。孔雀経改板を祝し、七座天神宮において今上皇帝御宝祚延長、当山御法頭御願円満、僧正定隆御寿命長遠、大樹殿下御武運太平、大壇越源義和公御武運長久など、また大小の新刻

願主除百病百難を御祈禱の祝詞 一〇月 「御本尊孔雀明王造立出来、御開眼成就」 一〇月五日 孔雀経開板並びに御本尊開眼成就につき、護摩一七日の修行を致したので祈禱札を進上申したく、村々の家教をお報せ願いたいとのこと

享和元（一八〇一） 九月 寛政六年以後の孔雀経開板勸募活動について、その経緯書上、当山方御録所へ文書差し出す文化四（一八〇七） 五月二十七日 菅江真澄、綴子村を訪れて「おがらのたぎ」に孔雀明王経開板のことを記す

以上の作成年譜と各資料の内容をもとにいくつかの問題点をあげておく。

第一、英泉所伝テキストの問題。

英泉が延享四年、最初に入手した『仏説大孔雀呪王経』は義浄訳の刊本だが、朱筆で詳細に訓点、校合が施されており、その末尾には次のような奥書がある。「御本云 貞享三年仲秋十一日以和本高麗印本及義浄訳本校對訓点了冀為弘宣乘一助也 河南教興傳（梵字） 浄嚴 四十有八 元録九年丙子季冬七日以覚勝大德真本点写之了 海慈 三十七 延享四丁卯年秋九月十七日 羽州山形城東小白川村払鬼山威徳院慧興園梨以真本伝授訓点了 羽州秋田郡綴子村 役末資玉峰英泉并有四 慧興師之本不空譯秘密儀軌也」。つまりこのテキストは、一、貞享三年に浄嚴によって和本、高麗印本、義浄訳

本と対校、二、元禄九年に海慈によって覚勝大徳真本と対校のうゑ書写、三、延享四年に英泉によって山形威徳院慧興所伝の不空訳本と対校、という計三度にわたり五種のテキストを段階的に対校してきたものであった。こうした英泉所伝の孔雀経テキストはすでに数度の校合作業を経てきたものが多く、英泉の校訂作業はその延長上になされたものと思われる。

第二、孔雀経開板の意義。

明和九年、英泉は『孔雀経開板発願文』を撰し、「一則兩足為王泣者天下少 寡財色為祖守者古今少 一為興法、二為国家三為壇越四為破邪 願為開板遍涉泥沙 小角古仏（寂滅）ヨリ今年マテ一千七十三年 中興祖師ヨリ今年マテハ八百十四年」とその開板の意図するところを四項に分かつて述べている。さらに同年に『孔雀経利益靈験』を撰し、「一兩高祖御依經トナサレ悉地証明ハ伝記等ニ見ヘタリ（講式。伝記。速証集等ニ。理源行実記。続礦石集） 一天子將軍御国君一切衆生迄太子御曹子嫡男誕生並安産ノ事（孔雀経ニ見タリ。元亨釈書ニモ） 一天子將軍御国君一切衆生迄無病安寧壽命長違ノ事（経説） 一風雨順序五穀成就ノ事（経説。元亨釈書） 一大旱請雨ノ靈験 蝗蟲退散諸願成就等ノ事（経説分明。理源行実記） 右五箇条ハ御經ノ項目ニシテ詳ノ事ハ経説 分明ナリ護法ノ念力奉 続兩高祖開板ノ助功謹テ所仰也」と、孔雀経誦誦の利益や靈験を五箇条にまとめている。これは、おそらく同じ頃の撰述と

思われる『孔雀明王経並法授受靈験』（年記欠）という英泉の著述をもとにしている。同書は元亨釈書、本朝編年録、続礦石集、五灯会元、金剛壽命陀羅尼經、理源大師行実記、禁秘抄等を出典に、孔雀経または孔雀法による靈験譚を十七例ほど抄出、編集したものである。こうした諸文献を博搜した上で開板発願文や孔雀経利益靈験をまとめているという英泉の周到さに注意しておきたい。孔雀経開板は英泉にとって校訂本を世に問うという学問的意義と共に、その効験をひろく世間に及ぼすという宗教的意義があったのである。

さらに、祈禱儀礼としての孔雀明王法も英泉のよく修するところであったが、經典の校訂作業といういわばデスクワークと、祈禱儀礼の修いうフィールドワークとが英泉においては平行して行われているということ。開板に関わる板木料や京都までの旅費等、諸経費が比較的詳細にわかるといふこと。当山派本山醍醐寺との関わり、寄進者の分布、開板後の孔雀明王像の開眼、開板成就の祝禱儀礼等、興味ある問題はまだまだ多いのだが、今回は孔雀明王経校訂本開板について基礎作業となる年譜作成にとどめ、残された各問題については別に検討する機会を持ちたい。

〈キーワード〉 修験、孔雀明王経、開板事業

（駒沢大学大学院修了・龍泉寺住職）